The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロブ＝グリエにおけるサディスムと虚無
Author(s)	神田, 修悦
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1993, 27, p. 65-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47805
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ロブ＝グリエにおけるサディスムと虚無

神　田　修　悦

I

サディスムとは、暴力で他者（異性）を服従させようとする欲望である。だが人は何故その様な欲望を抱くのか。様々な解釈が可能だが、重要なのは、倒錯とは常に抑圧されたものの反動だという事実である。サディストは力への意志の権化の様な存在だが、しかしそこに目を奪われているとサディスムの本質は見えてこない。むしろ事実はその逆で、サディストが暴力的にならざるを得ないのは、実際には彼らが力を持たないからである。この様な捉え方は精神分析の認めるところでもある。例えばセクソロジー研究者のストーは、サディストの心の底には「ある種の内的無力感が潜んでおり、サディスムは無力感に対する補償である」と言う[1]。これまで拷問や処刑の場面を好んで描いて来たロブ＝グリエもまた、同じ無力感に苛なまれているのだろうか。本論は、スキャンダルの種にこそなれ不明な点の多かった、ロブ＝グリエのサディスムの解明を目的とする。

ロブ＝グリエの内面世界を探る上で大きな手がかりとなるのは、*Angélique* の最後で告白されている、少年の頃のアンジェリックとの関係である。幼い少年を誘惑すると同時にはぐらかし、最後には不可解な死を遂げたこのアンジェリックとの関係は、甘美であるとともに恐ろしくもあった体験、いわば作家ロブ＝グリエの原体験をなす。特に彼女の股間から流れ出した経血（《sang maudit》）と、それに引き続く彼女の死が、どれほど

の精神的外傷を彼に与えたか想像に難くない。女性に関してまだ無知な少年時に同じ経験をすれば、恐らく誰でも女性に対して無力とならざるを得ない[2)]。

ロブ＝グリエの無力感を裏付ける証拠はまだある。彼の小説世界で常に重要な位置を占めて来たのは、《femme fatale》とも言うべき悪魔的な女性であった。彼女たちは、insaisissable な存在として男を翻弄すると共に（*La Jalousie* の A や *L'Immortelle* の L)、彼らを破滅へと導く危険な誘惑者でもあった（*Le Voyeur* の Jacqueline, *Angélique* の Carmina)。更にロブ＝グリエの吸血鬼幻想がある。80年代以降の作品には、男を誘惑しその血を吸うという、悪魔の化身とも呼ぶべき女性が頻繁に登場するが（例えば *La Belle Captive* の Angélique)[3)]、この血を吸われることへの恐怖は一考に値しよう。吸血鬼に血を吸われた者は死者として生きてゆかねばならないが、これは不能の隠喩だとは言えないか。そう考えれば、この幻想のもとにあるのは女性への恐れを反映した去勢不安の妄想ととれる。

以上の様に考えれば、ロブ＝グリエにとって女性は、恐怖を覚えずには近づけない存在であり、それ故また所有することも叶わない対象だと断定することができる。彼のサディスムは、この女性コンプレックスの反動である。彼が作品の中で女性を隷属させ暴力を加えるのは、そうすることで無力感を払拭し自身の優越性を確保できるからである。しかもそれは鬱屈した欲望の解消でもある。だがそれだけではない。問題はもっと複雑である。*Miroir* においてロブ＝グリエは次の様に語っている。

> Boris le rêveur est aux prises avec des sensations d'impossibilité, d'inaptitude [...]. Là encore, ce sont des troubles d'enfance qui remontent à ma mémoire. Et ils le font au mo-

ment où viennent de reparaître dans ma vie les fantômes de ma différence sexuelle[4].

つまり彼の性的倒錯は、*Régicide* の主人公ボリスが世界の中で味わっている違和感（当然これはロブ＝グリエ自身のものである）[5] と密接な関係にある。もしこれが事実なら、サディスムも異なる性差の問題として片付けるわけにはいかなくなる。問題の所在を明確にする為に、両者が具体的にどこでどう重なるのか探ってみたい。

II

まず最初に、問題のボリスの違和感の正体を明らかにしておく必要がある。果たして彼は世界の何に対して違和感を感じているのだろうか。答えはテクストの中にある。

> Il sentit en même temps *le flot visqueux* qui pénétrait rapidement dans tout son corps [...]. Et sa tête [...] s'emplit d'un seul coup *d'une bouillie grise,* lourde comme du plomb.
>
> Le temps devenait *sirupeux*; et même il se coagulait par place en gros caillots blêmes [...] En plein centre de *la gelée* le téléphone [...] se mit à sonner[6].

いずれの例にも共通するのは、「どろどろ」「ねばねば」した不定形なものの感覚である。この様な感覚から何が連想されるだろう。平岡篤頼氏も指摘している様に[7]、これは恐らく、『嘔吐』のロカンタンが感じていたのと似た感覚である。ロブ＝グリエ自身、かつてロカンタンの嘔吐感《malaise métaphysico-viscéral》を評して《la contingence agressive et poisseuse des choses》[8] という表現を用いたが、実際これはそのまま *Régicide* にもあてはまる。だとするなら、ここにあるのはサルトル的

な虚無の経験だということになる。身の回りのものが形を失いどろどろと溶けてゆくという感覚、これは存在に巣くう虚無を表現しようとしたものである。恐らくそれがボリスの違和感の正体であり、彼が世界に適応できないのも、まさに世界が無としか感じられないからである（ただこの虚無の経験はより現代的な文脈で捉え直すこともできる。例えばそれをラカンの言う「現実的なもの」《le réel》と重ね合わすことも可能である）。

ところでこの様な感覚は *Régicide* のボリスだけのものではない。我々は、「幼少時の不安」と関係するこの虚無の感覚がひとつの強迫観念となって常にロブ＝グリエを苦しめていると考えたい。彼の創作活動の背景にはいつも同じ虚無への恐れがあり、またそれ故にこそ彼は書くのである。*Régicide* 以降のテクストに目を向けてみたい。感覚的な表現が多用されていた処女作とは異なり，冷たく硬い文体が支配的となるが、しかしそこにもやはり裂け目は存在する。

例えば *Djinn* である。主人公シモンは謎の女性ジンの指令に従いある任務を遂行するが、その途中でひとりの少年に出会う。少年は舗石の隙間にできた水溜りにつまずき転倒し、シモンがその手当をする羽目となる。しかしこの出来事の後、物語は意外な展開をみせ、すべてが狂いシモンの死を招くこととなる。それだけにこの舗石のエピソードのもつ意味は重大で（作品の副題が《un trou rouge entre les pavés disjoints》であることを思い出したい）、それは少年同様シモンにとっても文字通り躓きの石だと言えるが、注目したいのは問題の水溜りがどの様に描写されていたかという点である。

> Par chance, il n'est pas tombé dans la boue, mais juste au bord de *ce trou d'eau sale.* Celle-ci, observée de plus près, semble *visqueuse, d'un brun rouge* et non pas noire. *Une*

angoisse incompréhensible pénètre en moi brusquement[9].

「赤褐色のねばねばした」感触、これは *Régicide* にあった《visqueux》で《sirupeux》な流体の感触と同じものではないか。それが「不可解な不安」を呼び起こしている点にも注意したい。この不安は不定形の無を前にしての嘔吐感と同じだとは言えまいか。舗石の隙間とはまさに世界の裂け目であり、主体を死へと導く虚無の象徴だと考えることができる。

同じ汚水のイマージュは *La Jalousie* や *Les Gommes* でも指摘できる。まず *Jalousie* で注目したいのは、強迫的に繰り返し語られる小川のエピソードである。谷間の底を小川が流れ、ひとりの男が橋の上から川底の何かを覗こうとしている。だが水は泥で褐色に濁り何も見えない。橋の上の男は恐らく、世界を自己の視線の支配の下におこうとする語り手の姿を具現したものである。それに対し底が見えないというのは、語り手の試みが実は不可能でしかないことを暗示する。そう考えれば、褐色に濁った泥水のイマージュは、世界の得体の知れなさの表れだと言える。小川の描写の執拗な反復に語り手の不安を読み取ることができようが、これはシモンが感じた「不可解な不安」と恐らく同じである。

Les Gommes については、カフェの場面で3度ほど登場する養魚鉢がある。鉢の中には何かがいるが、だが濁水に遮られてそれが何なのかわからない。かろうじて判別できるのは、「原形質の深み」の中の影と「かすかな水のうねり」だけである。カフェの主人はその影に囚われ、水中で輪舞する「亡霊と幻影」の姿に悩まされることになるが、得体の知れないこの養魚鉢の水の濁りもまた、理性を曇らせ、人を妄想の世界へと誘う虚無の呼びかけだと言うことができる。

虚無の経験は汚水のイマージュのもとでだけ現れるとは限らない。ロブ＝グリエの作品に頻繁に登場する海のイマージュも同じ文脈の中で考える

ことができる。例えば、*Miroir qui revient* の中で、海は《le règne des périls sournois où *les bêtes molles, visqueuses, se conjugaient aux lames sourdes*》或いは《un univers *liquide, inconnu, mouvant,* irrationel》[10] と語られるが、この「ねばねば」「ぬるぬる」とした不定形性は、*Régicide* や *Djinn* で既にみたイマージュと通底する。更に同じ *Miroir* には《les ténèbres qui remuent dans sa masse profonde, sous le calme apparent de la surface》(p.36) という表現もみられるが、この「水底で蠢く闇」への不安は、*Jalousie* や *Gommes* において濁水が惹起したのと同じものである。海のイマージュもまた虚無の象徴のひとつと捉えることが可能である。

III

我々の課題は、世界の中での疎外感と女性に対する無力感との関係を探ることであった。これまで述べたことをふまえた上で、問題の原体験の場面を次に考察することにしたい。

> J'ai introduit doucement la première phalange du médius [...]. Je me suis aperçu tout de suite que *l'intérieur était liquide, un peu gluant.* J'aurais voulu rompre mon engagement maladroit dans *cette chausse-trape,* mais ma maîtresse [...] entendait au contraire que je remue le doigt pour l'enfoncer davantage. *Un flot de sang s'est échappé entre les lèvres* disjointes [...][11].

危険を予感しながらも(《j'ai pressenti le danger》)、少年はアンジェリックに言われるまま彼女の陰部に指を挿入する。引用した一節はその決定的な瞬間を捕えたものだが、ここにはいくつか気になる点がある。第一

に、陰部の内部を形容する「べたべたした液体」だが、これは先に検証した《虚無の手触り》以外の何物でもない。第二に「落とし穴」という言い回し。陰部の奥で待ち構えているものへの不安を表現したものだが、これもやはり既に指摘した「水底で蠢く闇」への不安と無関係ではない。更に最後の一文、特に《entre les lèvres disjointes》という部分だが、ここから連想されるのは、*Djinn* の副題《un trou rouge entre les pavés disjoints》である。

それだけではない。*Angélique* には、ロブ＝グリエの個人的悪夢を語った4ページ程の断片がある。この断片は彼の原体験とも密接な関係にある。

> Je m'avance avec un croissant malaise [...] avec lenteur en tout cas, dans une sorte de souterrain très encombré (engorgé [...]), que j'imagine bourré de pièges...[12]

これは悪夢の冒頭の部分である。一見してわかる様に、この一節は原体験の断片を下敷きにして書かれている。《je m'avance avec lenteur》は《j'ai introduit doucement》を発展させたもので、《pièges》は《chausse-trape》の言いかえに他ならない。悪夢の舞台《souterrain engorgé》が一体どこなのかもはや明らかであろう。それは紛れもなく女性の胎内である。ここでも注目すべき表現がいくつかある。

まず、この断片でもやはり「ねばねば」した感触が支配的である。だがその感触は同時に「刺すような」とも形容されている（《Une pointe aiguë, ai-je dit. Oui, le gluant et l'acéré semblent s'engendrer》(p.230)）。相反するものがひとつになった様な、この両義的な感触を説明してくれるのは、サルトルを評してロブ＝グリエが用いた《la contingence *agressive et poisseuse* des choses》という表現である。この表現については既に触れた通りである。また、《sécrétion》《excréments》

(p.230, 232) というロブ＝グリエには珍しい生理的な表現、或いは《les hontes secrètes de l'anatomie》《le dédale interne des organes》(p.230, 232) にみられる内臓的なものへの志向も、同じくサルトル的な虚無を要約的に述べた、ロブ＝グリエの《malaise métaphysico-*viscéral*》に呼応する。更に、断片全体を締めくくる一文《Chose dorénavant parmi les choses, l'informe, peu à peu, se referme sur moi》(p.232) における、informe なものの横溢も見過ごせない。

以上2つの断片の考察から、女性もまた、*Régicide* に発する様々な不定形なものの系譜につらなることは明らかである。ロブ＝グリエにとって女性の身体は、ロカンタン的な嘔吐を呼び起こす底無しの闇なのである。世界に対する違和感と原体験に由来する女性コンプレックス、これらは互いに重なり合っているのだが、その背後には実は同じ虚無への恐怖が潜んでいる（両者の関係は相補的関係にある。世界という枠の中では女性はその一部に過ぎないが、同時にロブ＝グリエのテクストでは、世界のいたるところに常に既に女性的なものの気配が感知される。例えばシモンを飲み込んだ《舗石の隙間＝女陰》。また *Jalousie* の「谷間の底を流れる小川」。これは女性の下腹部を連想させる)。さて、このことを念頭において、最後にサディスムの解明を試みたい。

IV

ロブ＝グリエはこれまで拷問や処刑の場面を繰り返し描き、作品の中で数多くの女性を死に至らしめて来た。だが注意しなければならないのは、彼のサディスムが、サド或いはバタイユのいわゆる純粋な《消尽》(dépens) とは異なることである[13]。それはただ破壊することだけを目指したものではない。その点がロブ＝グリエのサディスムの特異なところであり、また問題を解く鍵もそこにある。ロブ＝グリエのサディスティッ

クな幻想の典型として《La chambre secrète》の冒頭の部分を検証したい。

> C'est d'abord une tache rouge, d'un rouge vif, brillant, mais sombre, aux ombres presque noires. Elle forme une rosace irrégulière, aux contours nets, qui s'étend de plusieurs côtés en larges coulées de longueurs inégales [...]. L'ensemble se détache sur la pâleur d'une surface lisse, arrondie, mate et comme nacrée [...]. A côté du demi-globe ensanglanté, une autre rondeur identique, intacte celle-la, se présente au regard [...][14].

ここにあるのは mutilé された女性の身体である。少なくとも référent のレヴェルではそうである。だが語りのレヴェルでは違う。身体は色と形に還元され（乳房は《demi-globe》、肌は《surface》である）、そもそも肉感というものが感じられない。全体を支配するのは、アナーキーな violeur の視線ではなく、むしろすべてを精確に記述しようとする解剖学者の視線である。ロブ＝グリエのエロチスムは、しばしば冷やかで官能性に乏しいと指摘されるが、その理由のひとつがここにある（例えばロブ＝グリエにとって女陰は《symétrie axiale aux contours compliqués》[15]でしかない）。だがなぜそれほどまでに精確さに拘るのか。破壊を語りながらもいささかも破壊的でないこの様な断片から、果たして我々は何を読み取るべきだろうか。

ヒントになるのはロブ＝グリエ自身の《j'écris pour détruire, en les decrivant avec précision, des monstres nocturnes qui menacent d'envahir ma vie réveillée》[16]という言葉である。ここにある様にロブ＝グリエにとって精確さ《précision》とは、様々な「魔物」から身を守

る為のひとつの手段に他ならない。詳細な描写は、得体の知れない存在、すなわち虚無に形を与え、それを理解可能なものに変えることをその目的とする（ロブ＝グリエの主人公たちの多くは執拗に自身と世界との距離をはかり、目印をつけ、ものの輪郭をなぞろうとしていたはずだ。彼らを描写へと駆り立てるのは不定形なものへの不安である。その典型は *Jalousie* の語り手であろう）。ところで、サディストの戦略もこれと同じだとは言えないか。いいかえるなら、彼らが目指しているのもまた「魔物の息の根を止める」ことではないか。ロブ＝グリエにとって女性はやはり不定形なものの象徴であり、彼を奈落へと誘う得体の知れない存在であった。

この点に気がつけば、ロブ＝グリエのサディスムが、語りのレヴェルでなぜ破壊とならないのかその説明がつく。それが破壊的でないのは、サディストが、女性という虚無をまず何よりもその攻撃の対象としているからである。問題になっているのは、形を与えることで不定形な無を解体すること、いわば《décomposition》（分解＝分析）とでも呼べる操作なのである。我々はこの様な操作をもはや破壊とは呼べないだろう。むしろ反対で、そこにあるのは organiser しようとする意志である。それこそがロブ＝グリエのサディスムの本質である。

同じことは別の角度から検証することもできる。これまでしばしば指摘されて来た様に、ロブ＝グリエのサディスティックな幻想は、様々な cliché（彼自身の言葉を借りるなら《figures peintes à plat》）の寄せ集めとして成り立っている。ところで cliché とは何だろうか。それは型にはめられたもののことである。cliché となることで現実は生々しさを喪失し、表層（《à plat》）へと還元されることになる。その点では cliché もまた《décomposition》の操作の一種であるとは言えないだろうか。cliché として描くことで、ロブ＝グリエはまさに女性という不定形の存在を《fixer》すること（型にはめる＝捕らえる）を試みているのである（ロ

ブ＝グリエが女性に好んで用いる《lisse, fragile, nacré》という紋切表現はその典型である。それは女性を表層化し無害化する力をもつ)。やはりこれもロブ＝グリエの organiser しようとする意志の表れだと言えるだろう。

以上の様に考えるならば、我々はロブ＝グリエのサディスムを、単なるコンプレックスの問題として捉えることはもはやできない。ロブ＝グリエのサディスムは、フェミニスム系の批評家から激しい非難をこれまで浴びて来た[17]。victime となるのが常に女性だからである。だが、ただロブ＝グリエの女性への敵意と憎悪をあげつらうだけの議論は、我々をどこにも導いてくれない。それは不毛な議論である。

確かにロブ＝グリエの心の中には女性に対する無力感が存在する。またそれに由来する憎悪もあるかも知れない。だが、その無力感から逃れんが為に、作品の中で彼が女性を虐待していると考えれば、それは間違いである。少なくとも、テクストのレヴェルではそうではない。書く過程の中で、女性への恐怖や無力感の問題はその位相をずらされ、より大きな問題へと統合されていると我々は考えるべきである。その問題とは、言うまでもなく虚無との対峙という問題である。先にも述べた様に、ロブ＝グリエの小説創造の中心には常にこの問題がある。すべてをなし崩しにする、ねばねばした何か生々しい感覚、ロブ＝グリエの多くの主人公たちに付きまとっているのは同じこの感覚である。そこから逃れる為に、例えばボリスは王の暗殺を企て、*Jalousie* の語り手や *Voyeur* のマチアスは描写の力に頼ろうとする。サディスムも恐らくこれと同じである。サディスムとは、まず何よりも虚無への反逆だと我々は解したい。

☆　　☆　　☆

どの様な作家にもその作家固有の偏執がある。そもそも何かに取り憑かれているからこそ作家は書くのである。読者の側も同じで、何らの偏執も感じられない作品は退屈であり、それではテクストの快楽もあり得ない。その意味では、作家も読者も多少なりとも一種のフェティシストだと言えるかも知れない。ロブ＝グリエについても事情は同じである。偏執的だからこそ、恐らく我々は彼の作品に惹かれるのである。ただ、作家が自身について語ることが従来少なかっただけに、我々が彼の偏執をどれだけ理解しているか甚だ疑問である。本論ではロブ＝グリエ最大の偏執サディスムに焦点を絞り、新たな光りのもとでその解明を試みたが、この様な方向での研究は、『ロマネスク』が刊行されただけに、今後ますます重要となって来るのではないかと思われる。

注

*本文、引用文ともイタリックはすべて筆者による。

1) A.ストー、『性的逸脱』(理想社／1985)、84頁
2) A.Gouletもやはりこの少年時の体験を《scène originelle》と位置付けその詳しい分析を行っている。Cf. A. Goulet et R.-M. Allemand, *Imaginaire, écriture, lecture de Robbe-Grillet*, Arcane-Beaunieux, 1991.
3) この死をもたらす呪われた血のイマージュがアンジェリックの経血と関係があることは明らかである。
4) A.Robbe-Grillet, *Le Miroir qui revient*, Minuit, 1985, p.44.
5) ロブ＝グリエ自身はこの違和感を《sentiment d'extériorité》(*Ibid.*, p.149) と称している。
6) A.Robbe-Grillet, *Un Régicide*, Minuit, 1978, pp.27–28 et p.46.
7) A.ロブ＝グリエ『弑逆者』(白水社／1991年) 解説を参照のこと。
8) *Le Miroir qui revient*, p.165.

9) A.Robbe-Grillet, *Djinn*, Minuit, 1981, p.28.

10) *Op. cit.*, pp.13–14 et p.37.

11) A.Robbe-Grillet, *Angélique ou l'enchantement*, Minuit, 1988, p.243.

12) *Ibid.*, p.229.

13) サドとロブ＝グリエの相違点に関しては Suleiman が論じている。Cf. S. Suleiman, "Reading Robbe-Grillet: sadisme and text in Projet pour une révolution à New York", *Romantic Review*, Jan. 1977, pp.43–62.

14) A.Robbe-Grillet, 《La Chambre secrète》 in *Instantanés*, Minuit, 1962, pp.97–98.

15) A.Robbe-Grillet, *Projet pour une révolution à New York*, Minuit, 1970, p.193.

16) *Miroir qui revient*, p.17.

17) 擁護派と反対派のこれまでの議論の経過は Ramsay の著作が詳しい。Cf. R.Ramsay, *Robbe-Grillet and Modernity*, U.P.F., Gainesville, 1992.

（大学院後期課程学生）